170豊島区 雑司が谷

雑司が谷

鎌倉時代以後に起こった地名で古い文献には、「曹司谷」「雑士ヶ谷」などとも書かれる。雑司が谷に一定したのは、徳川吉宗が定めたためであるという。建武の頃、朝廷で雑式の職を務めたものが、衰えるのを嘆いて移り住んだなどが「雑司」の由来。「谷」は、丸池を水源とする川が流れ、谷間を造っていたからとされる。

高田本町の一部などを合わせた昭和四十一年の住居表示で、雑司ヶ谷町を雑司が谷と変更。

雑司が谷でしられるのは、何といっても鬼子母神であろう。子授け、子育ての神として江戸時代から信仰を集めた。ススキの穂で作ったミミズクは江戸時代から売られ、「江戸名所図会」の挿絵にも描かれている。

鬼子母神縁起







鬼の字に注目、上は銀杏の大樹。下 の写真は「ザクロ」である。それぞ れ文中の説明をご参照。

東京に唯一残る路面電車の都電荒川線を鬼子母神前で下車すると、直ぐ前に参道への 入口がある。ケヤキ並木の参道を行くと、土産店や飲食店が門前町らしい雰囲気を作る奥 に、雑司が谷の鬼子母神で知られる鬼子母神堂がある。

山手台地の一部をなす標高三十メートルほどの雑司が谷台地に位置するこの地は、眺望のよい閑静な田園地帯だった。この地に鬼子母神堂が出来たのは、江戸より古く天正六年と伝えられる。伝説によれば、戦国時代、北条氏が江戸城を支配していた頃、村人が目白台の畑の中から(元文京区目白台・清土)赤子を抱く一体の仏像を発見した。物知りに見せると、それは世にももったいない鬼子母神像であるという。すぐに法明寺に安置したが、十数年後ひとりの修行僧がこれを盗み出し、故郷房州へ持ち帰った。まもなく僧は発狂し、「我は雑司が谷の鬼子母神なり。我を本の地に帰すべし。さもなくば祟りあるべし」と口走ったので、里人は大いに驚き、仏像を現在地に特別に一堂を建てて祀ったという。これが鬼子母神堂である。

鬼子母神像が発見された場所は、「清土鬼子母神」といわれ、護国寺前の不忍通りを西へ行った右手高台にある。「鬼子母尊神出現所」と刻まれた石柱が建ち、かたわらに文化九年に建てられた芭蕉の「此道に出て涼しさよ松の月」の句碑が残されている。

鬼子母神の鬼子母は、サンスクリット語のハーリティの漢訳で、インドの王舎城の夜舎神の娘。千人の子を産んだが、他人の子を奪って食べるので、恐れ憎まれた。これを聞いた釈迦は、彼女の最愛の末っ子を隠し、嘆き悲しむ彼女に「千人のうちの一人を失うもかくの如し。いわんや人の一子を喰らうとき、その父母の嘆きや如何」と戒めた。改心した彼女は、仏法の護法神として、子供の守護神となったという。

そのため、鬼子母神の「鬼」の字は、上部にある「ノ」字を書かないのが正式という。 角がないという意味だ。

江戸時代に入ると、子授け、安産などに御利益があるとされる鬼子母神は、加賀前田家や将軍家大奥の篤い崇敬を受け、江戸市民の信仰を集めるようになった。現存する本堂・ 拝殿は、加賀藩主前田利常公の娘で、安芸藩主浅野家に嫁した自昌院の寄進で寛文六年に 建立されたと伝えられ、都の有形文化財に指定されている。

鬼子母神堂のご本尊は、秘仏で拝観することはできないが、鬼の姿ではなく、幼児を 抱いて吉祥果(ザクロの実)を持ち、優しいお姿をされているらしい。だから、お堂のあ ちこちにザクロのマークがあり、絵馬の絵もザクロだ。

元禄のころからの寺社参詣の流行とともに、物見遊山を兼ねた参詣で賑わうようになり、「め組の喧嘩」の手打ち式がおこなわれたという「茗荷屋」などの料亭や茶店が立ち並んだ。

境内には、赤い鳥居の稲荷社や小堂があるが、なかでも目立つのは樹齢六百年という 銀杏の大樹である。樹高三十メートル、幹周り八メートルといい、都内でも麻布善福寺の 銀杏に継いで二番目の巨木という。「子授け銀杏」と示され、注連縄が張ってある。

また、境内の中ほどに軒の低い古びた店があって、よく子供たちが寄っている。これは「江戸名所図会」に「風車、藁細工の獅子、川口屋の飴を此地の名産とす」とあるその川口屋である。今では飴は作らず、品物は様変わりしているが、子供相手の駄菓子屋である点は変わらない。

江戸時代、このあたりに貧しい母娘が住んでいた。母が病みついたが、娘は薬を買う 銭もなく、ただここで祈るだけだった。すると、夢に鬼子母神が現れて、「このあたりに生 い茂るススキを刈って、ミミズクをつくり売ってごらん」とお告げがあった。そのとおり にすると、実によく売れて、おかげで薬を買い、母の病も癒えたという。

ところで、鬼子母神堂は、独立したお寺ではなく、日蓮宗法明寺のいわば塔頭のひとつなのである。法明寺は、この御堂から二百メートルほど北であり、戦災では焼失したが、現在は立派な伽藍をかまえている。戦国期の関東の雄、豊島氏の墓域もある。八重桜の美しい寺という。

ところが、昭和の中ごろの地番整理によって、法明寺と鬼子母神とは分断される羽目になった。鬼子母神の方は、豊島区雑司が谷三丁目に残ったが、法明寺の方は南池袋三丁目になってしまったのである。

「すすき みみずく」造りの継承

平成二十二年に当地で保存会が発足し、平成二十三年九月、次のような一連の報道がなされた。

保存継承の危機に、地域で保存会発足

二十二年五月、すすきみみずくの最後の作り手であった岡本富美さん(音羽屋)が、 高齢のため店じまいすることになり、このままでは江戸時代から続く郷土玩具が消えてしまうと、地域の町会や商店街の有志が立ち上がり、保存会発足のため動き出した。これに、 雑司が谷の文化と歴史を活用したまちづくりプロジェクトを進めていた区も協力し、六回 の準備会を経て九月二十八日、鬼子母神の本坊である威光山法明寺住職(近江正典さん) を会長に「すすきみみずく保存会」が発足した。

保存会では、製作技術を伝承していくための講習会の開催に重点を置き、二十二年度は七回開催、延べ二百五十七人が参加した。二十三年度からは原則毎月一回、第一日曜日に講習会を開催している。

製作したすすきみみづくは、二十二年七月に雑司が谷の情報ステーションとして鬼子 母神参道に開設した「雑司が谷案内処」や、鬼子母神の祭礼等で販売している。 素材となるススキを求めて秩父市に - 「ふくろう」が取り持つ縁-

保存会の発足にあたって課題となったのが材料となるススキの調達。講習会を開催するには大量のススキが必要となるが、区内にはススキが自生しているような原っぱはない。そこで、高野之夫豊島区長が姉妹都市である秩父市の久喜邦康市長に調達場所のあっせんを要請。同市農政課の協力により、昨年は九月に三回、保存会メンバーが秩父市を訪れ、約25,000本のススキを採取した。

秩父市と豊島区は西武池袋線の起終点で結ばれていることから昭和五十八年に姉妹都市提携を結んでいる。また、平成二十一年には、さらなる交流・連携を促進するため、池袋のマスコット的存在であるフクロウと、秩父市の観光名所秩父神社の「北辰の梟」に因

んだ「ふくろう協定」を締結している。

「ふくろう」が取り持つ縁で、秩 父市のススキですすきみみづくを作る という取り組みも二年目を迎え、今年 も九月十五、十七、十八日の三日間、 秩父市でのススキ刈りが行われた。(写 真)

刈り取ったススキは約 23,000 本。 持ち帰ったススキは皮むき、乾燥処理 を行い、教材として活用される。



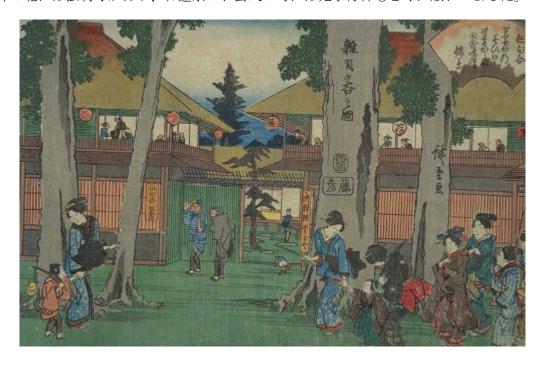
すすきみみずく

雑司が谷鬼子母神の参詣土産として江戸時代から伝わる郷土玩具。ススキの穂を二十本ほど束ねて作り、ササにぶら下げて飾るもので、「木鬼になってぶらぶら枯尾花」など、川柳にも詠われている。また、貧しい孝行娘が母親の病気快癒の願掛けに毎夜お参りしたところ、鬼子母神が表れ、そのお告げにより作って売りだしたのが評判となり、幸せになったとの逸話も語り継がれている。

江戸の食文化事情(雑司が谷の茗荷屋)

下に掲げる絵「江戸高名会亭尽 雑司ヶ谷の図」は国立国会図書館に所蔵されている 歌川広重の作である。「江戸名所百景」とは別ものであるが、この絵を元に江戸の食文化事 情をまとめられた松下幸子千葉大学名誉教授の文章を以下に紹介する。 「江戸時代後期の宝暦(1751~64)頃から江戸には本格的な料理屋が出来はじめ、雑司ヶ谷(豊島区)の茗荷屋もその一つで、文政七年(1824)刊『江戸買物独案内』飲食の部の御料理の中に「即席御料理 雑司ヶ谷 茗荷屋沖右衛門」とあります。

雑司ヶ谷には安産と子育ての神として参詣人の多い鬼子母神(きしぼじん)があり、 門前の左右には茗荷屋などの料理屋、茶屋、土産物屋などが軒を連ねていました。鬼子母 神の北には法明寺があり、日蓮宗のお会式の時には鬼子母神もとくに賑わいました。



絵の正面の入口には「御料理めうがや」とあり、二階建が二棟見えます。入口の左手の塀に「仙女香 坂本氏」と書いた看板がありますが、仙女香は南伝馬町三丁目にあった坂本屋から売り出された白粉の名です。仙女香は、名女形瀬川菊之丞の名で売り拡められ、彼の俳名が仙女であったところからの名といいます。多くの出版物や版画などにも盛んに広告をし「何にでもよく面を出す仙女香」の川柳もあります。

左端の母子連れの子供が持っているのは、鬼子母神土産のみみずくです。

茗荷屋は即席御料理とありますから、注文に応じてすぐ料理を出す料理屋ですが、蕎麦もおいしかったのでしょうか。芝居好きで有名な隠居大名柳沢信鴻の『宴遊日記』は安永二年(1773)から天明五年(1785)までの日記ですが、雑司ヶ谷参詣の時には茗荷屋に寄って蕎麦を食べています。安永二年から安永七年までに十一回茗荷屋に寄り、打懸(ぶっかけ)蕎麦一回、蕎麦八回、しっぽくそば(鴨、芹、くわい、茄子、牛蒡)一回、もう一回は蕎麦だけでなく、茶飯、硯蓋物(口取り類)、鉢肴(鉢に盛って出す肴)もありました。信鴻は蕎麦好きとしても知られており、日記には多くの蕎麦屋が登場します。」と。

おわり

次項へ